

特集 ■ 高次脳機能障害治療の実践

2004 年の厚生労働省の発表では、全国の高次脳機能障害者は 30 万人と推計された。その後、2008 年に実施された東京都による実態調査では、都内で 50,000 人と推計された。単純計算で、全国で 50 万人にも達すると考えられ、その実数はわずか 4 年間で飛躍的に増加したことになる。本特集では、高次脳機能障害の実情、問題点にとどまらず、医療・福祉の現場で行われている治療・支援の実践を紹介し、今後の展望について解説した。

わが国における現状と課題 (橋本圭司氏, 7 頁)——

2008 年に行われた東京都における高次脳機能障害実態調査の結果や、近年のわが国における高次脳機能障害治療の現状と課題、展望などについてオーバービューしている。今後の高次脳機能障害に関するリハビリテーションは、評価にとどまらず、その改善のための具体的介入についての検証がなされるべきである。

先進的医療技術を駆使した治療戦略 (角田 亘氏ら, 11 頁)——

機能的 MRI や反復経頭蓋磁気刺激などの先進的医療技術を用いた失語症や半側空間無視に対する治療の実践について紹介し、今後の展望について解説している。多職種によるチームアプローチのみならず、医師自身が具体的な治療介入に関わることが、今後のこの分野のリハビリテーションに求められる。

認知リハビリテーション (中島恵子氏, 17 頁)——

さまざまな認知リハビリテーション課題を用いて治療を行った低酸素脳症患者の症例を通して、認知リハビリテーションの有効性と今後の展望について解説している。具体的な認知リハビリテーションの考え方、プロセスを理解することができる。

プロセス指向の人間性認知行動リハビリテーション (中村俊規氏, 23 頁)——

精神科医からみた心的外傷を伴う高次脳機能障害に併存する精神症状分類を示し、独自のプロセス指向認知リハビリテーションの実践について解説している。高次脳機能障害のなかでも、情緒行動障害へのアプローチは、精神科的手法が有用であり、今後、リハビリテーション医療と精神医療の連携がさらに望まれる。

通所リハビリテーション (永吉美砂子氏ら, 29 頁)——

福岡市心身障がい福祉センターにおける包括的・全体論的リハビリテーションプログラムの実践について紹介し、その有用性について解説している。福祉施設での具体的なプログラムの実施のノウハウは、他施設にも大変参考になる。